

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2017.12) 平成29年度:1-2.

3因子からみた青年期の医療系学生におけるデートDVの認識と特性

沼倉 香帆, 早坂 彩音

3 因子からみた青年期の医療系学生におけるデートDVの認識と特性

沼倉 香帆 早坂 彩音

(指導：大上 育子)

I. 緒言

Domestic violence (配偶者からの暴力) は2001年に「配偶者からの暴力防止及び被害者の保護に関する法律」¹⁾が制定、施行された。2004年の同法改正時には「配偶者からの身体に対する暴力」に「これに準ずる心身に有害な影響を及ぼす言動」も暴力として追加された²⁾。さらに、2008年には市町村においても基本計画の策定が努力義務となった。2014年には法律の適用対象を同居する交際相手からの暴力及びその被害者に拡大した³⁾。しかし、同居せず経済的基盤も別個である恋人間で生じる暴力は対象外であり、防止・予防体制は不十分である²⁾。

思春期や青年期男女を対象にした暴力に関する調査結果⁴⁾では、法的拘束力のない婚姻外の男女間にも暴力行為が存在し、その暴力行為が常態化していることを問題視している。村井ら⁵⁾は、デートDVを「親密な恋人間で、甚だしい感情表現と異常な行動を伴い、心身を傷つけ、人権を制限・剥奪する行為」と定義づけている。

河野ら⁶⁾は、看護学生は講義でデートDVについて学ぶ機会が多く認知度は高いが、内容までは理解していないことを明らかにしている。先行研究より医学科を含めたデートDVに関する研究はなく、認識や教育の効果について明らかにされていない。そのため、医療系学生を対象とし、デートDVの被害者・加害者となりやすい10~20代の青年期の男女が3因子からみてどのようにデートDVを認識しているのか、また、その特性を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 用語の定義

- 1) 青年期男女：親密な交際相手の有無に関わらず、18~25歳までの男女。
- 2) 医療系学生：医療系大学に在学している医学科、看護学科の男女。
- 3) デートDV：親密な関係であると認識している婚姻外の男女間での支配・服従的、身体・心理的、性的な要因に基づく多様な暴力行為。
- 4) 認識：人間が物事を知る働きおよび知りえた成果。

2. 調査期間：2017年8月23日から9月14日。

3. 研究対象：医療系A大学に在学している医学科・看護学科1~4学年で、18歳から25歳までの男女。

4. データ収集方法：口頭および書面で調査内容の趣旨を説明し、無記名によるアンケート用紙を配布した。配布日当日の放課後まで回収箱を設置し、回収箱への投函をもって研究への同意が得られたものとみなした。

5. 調査内容

- 1) 属性：性別、年齢、学科、学年、住居、婚姻状況、交際相手の有無、性交渉の有無
- 2) デートDVの認識：デートDVについて知っているか、情報源、防止教育(受講の有無、年齢、内容、講師)、デートDVの現状について知っているか
- 3) 尺度：富安ら⁴⁾の作成した質問紙をもとに、「支配・服従的暴力」、「性的暴力」、「身体・心理的暴力」の3因子(23項目)を関連因子とし、「そう思う」、「思わない」、「わからない」の3段階で回答欄を設けた。

6. データ分析方法：統計ソフトSPSS ver. 22を用い、ロ

ジスティック回帰分析の強制投入法を用いて分析した。なお、有意確立 $p < 0.05$ 以下を統計学的有意差ありとした。

7. 倫理的配慮

無記名によるアンケート調査票を用い、集計後のデータは統計学的に処理することで個人の特定を避けた。調査票は研究終了後速やかに破棄し、研究結果は本大学のみにて発表すること、研究への参加は対象者の自由意志のもとに行い、研究の不参加による不利益を被らないこと、看護学科卒業研究抄録に掲載されることを口頭及び書面にて説明した。また、性別による個人の特定を避けるため、看護学科2学年は女性のみを対象とした。

III. 結果

調査票の回収率は75.6% (739名中559名)であった。有効回答数は91.1%で、医学科314名、看護学科195名であった。対象者の平均年齢(土標準偏差)は20.59(±1.529)歳であり、男女差はみられなかった。

1. 対象者の属性

住居	アパート	65.3%
	下宿	14.3%
	実家	17.4%
	その他	2.9%
婚姻状況	既婚	1.4%
	未婚	98.6%
交際相手	いる	76.8%
	いない	23.2%
性交渉	あり	65.8%
	なし	34.2%

2. デートDVの認識

言葉もその内容も知っている	言葉もその内容も知っている	33.7%
	言葉も知っている	49.0%
	どちらも不明	16.7%
	知らない	0.0%

3. 特別講義の受講

受けたことがある	31.4%
受けたことがない	47.3%
不明/覚えていない	21.3%

4. デートDVの現状

被害率	男	2.7%
	女	63.4%
	知らない	24.2%
	不明	9.7%
経験年代	10代	33.2%
	20代	66.8%
	30代	1.8%
	40~50代	0.2%
法律	ある	27.2%
	ない	25.7%
	不明	35.8%

5. デートDVの3因子からみた知識

1) 第I因子：支配・服従的暴力(12項目)

有意差はないが、年齢において $p < 0.097$ であり、年齢が上がる毎に、正答率が高い傾向があった。

2) 第II因子：性的暴力(7項目)

学年別では、全項目で1学年が他学年と比べて正答率が低く、2学年との間で有意差があった。交際相手の有無では、いない者の方が正答率が有意に高かった。

		n	オッズ	95%信頼区間	P値
学年	1学年	149			0.177
	2学年	111	2.696	1.1 ± 6.6	0.031*
	3学年	110	2.064	0.7 ± 5.5	0.154
	4学年	130	1.997	0.6 ± 6.5	0.256
交際相手	いる	383			
	いない	117	5.849	2.1 ± 16.1	0.001**
定数			1.403		0.917

3) 第III因子：身体・心理的暴力(4項目)

全項目において、対象者全員がほぼ満点であった。

IV. 考察

1. 青年期の医療系学生のデートDVの認識

村井ら⁵⁾は、「デートDV」という言葉を知っている大学生は3割にも満たないとしている。A大学の医療系学生において、「言葉も内容も知っている」33.7%、「言葉は知っ

ている」49.6%であり、言葉の認識は8割を超えていることから、「デートDV」という言葉の認識は高いと考える。

富安ら⁹⁾は、中学・高校からの早期の防止教育の有用性を明らかにしているが、今回、防止教育の有無による正答率に有意差はなかった。教育の長期的な効果は明らかにされておらず、青年期を対象とした本研究では、教育の有無だけでなく、学習環境や年齢に伴う経験が対象の正答率の高さに影響を及ぼしているのではないかと考える。

2. 3 因子からみたデートDVの認識について

富安ら⁹⁾は、「支配・服従的暴力」は、その他2因子よりも得点率が低く、暴力と認識されにくいことを明らかにしている。今回、3因子間での正答率の有意差はみられず、3因子とも正答率は高かったが、他2因子と比べて「支配・服従的暴力」は正答率が低い傾向にあった。その原因として、生命の危機に直結するものではない精神的な暴力であることや個人で言動の受け取り方が異なるためだと考える。また、年齢別にみると全項目で、年齢が上がるほど正答率が高かった。大学での学習が専門的な内容に深まってくることや自分自身や周囲の経験から様々な情報を得ることによって、能動的に情報を収集する能力が身についたためと考える。それらが年齢別における「支配・服従的暴力」の認識の差に関連しているのではないかと考える。

「性的暴力」に関して、学年別では、全項目において1学年の正答率が低い傾向にあった。上野ら²⁾は、性的対人関係能力が高い者は、交際経験が豊富で、満足した深い関係を構築している傾向があること、また、性的対人関係能力の高さはデートDV防止に繋がることを明らかにしている。1学年では、高校を卒業してまもなく、異性との対人関係能力や、身近な人物の性的暴力被害・加害の経験を見聞きすることが少ないため、「性的暴力」の認識が低かったと考える。

交際相手の有無でみると、交際相手がいらない者の方が有意に正答率が高かった ($p < 0.001$)。藤田ら⁷⁾は、交際関係にあると相手を支配できるような気持ちになり、愛情の表現だと感じる者もいる。また、デートDVだと気づいていても、2人の関係を保つために我慢をする者もいるとしている。そのため、交際相手がいらない者の方が「性的暴力」に関して、客観的な判断ができており、今回の正答率の高さに繋がったと考える。

「身体・心理的暴力」に関して、どの学科、学年、性別においても、全項目においてほぼ全員が暴力であると認識していた。身体的暴力は、客観的根拠、生命に直結していることから、容易に第3者が暴力と判断しやすいことと関連していると考えられる。

3. 医療系学生のデートDVの内容理解の特性

本研究では、医学科・看護学科ともにデートDVの知識に関する正答率は高く、正確な知識を持っている者が多かった。医療系学生は小児や高齢者における虐待やDVの被害状況といった具体的な内容を講義で学ぶ機会が多い。そのため、防止教育の有無に限らず、様々な学びとデートDVを関連付けて考えていることが、今回の正答率の高さや正しい知識の定着に関連していると考えられる。

福島ら⁸⁾は、低いジェンダー意識や自尊心が将来DVを引き起こし、DVを暴力と認識できない可能性に結びつくことを明らかにしている。藤生ら⁹⁾は、看護学生は患者との相互関係から自分は人の役に立っている喜びと誇りを感じる機会があることや、そのような経験の積み重ねによって自尊心が高まり、また、他者への思いやりといった感情が育まれやすいことを示唆している。今回、医療系学生の正答率が高かったことから、自尊心の高まりや他者

への思いやりといった倫理観が、グループワークや実習などの医療系大学の教育内容によって養われているのではないかと考える。

また、村井ら³⁾はアイデンティティが低いと対等な関係を築きにくく、デートDVの認識にも影響を及ぼすことを明らかにしている。畑田ら¹⁰⁾は、医療系学生においては早期にアイデンティティが達成されており、比較的早期に自分の職業を選択する傾向があることを明らかにしている。医療系学生は、専門職に進むために中学・高校から自らの進路を選択するなど、他の一般科を専攻する学生よりもアイデンティティの確立が進み、他者との調和への認識が高いと考える。思いやりや他者との調和といった能力は、将来チーム医療を担う上でも重要な能力であると考えられる。

医療系学生においては早期に職業選択を行い、アイデンティティの確立や医療に関わる関心がもともと高いことがデートDVへの関心の根拠にあると考えられる。また、大学での学習の中でデートDVに関わる情報を得やすく、実習などでの他者との関わりを通して、自尊心や他者への思いやりなどの学びが得られやすい。以上より、医療系学生であるという基盤に加え、学習環境の影響を受けることが、デートDVに関する正しい知識の定着に関連していると考えられる。

V. 終わりに

医療系学生はデートDVの被害者・加害者と意図せず関わっている可能性が高い。正しい知識を持っている者として、早期にデートDVを発見する役割や、学生団体のような活動を通して、中学・高校といった若い年代に正しい知識の普及を図っていく役割を担っている。特に、支配・服従的暴力に関しては、早期からの教育が必要であり、同時に自尊心を高めるような教育内容の検討も必要であると考えられる。しかし、本研究では、他学部との比較や自尊心、アイデンティティに関する設問を設けていないため、今後それらを含めた調査を行っていく必要がある。

謝辞

本研究に協力いただいた学生の皆様および教員の方々へ厚くお礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 内閣府男女共同参画局(2015):男女間の暴力における調査報告書、内閣府男女共同参画局推進課
- 2) 上野淳子, 松並知子, 青野篤子, 他(2012):大学生の性に対する態度がデートDVに及ぼす影響, 四天王寺大学紀要, 53, 111-122.
- 3) 村井亜里紗, 杉谷仁美, 竹治圭登, 他(2016):デートDVの概念分析, 母性衛生, 57(2), 421-429.
- 4) 富安俊子, 鈴木江三子(2011):青年期男女におけるデートバイオレンスの認識と性差間の相違, 母性衛生, 51(4), 626-632.
- 5) 河野小百合, 藤本藍奈, 安井彩香, 他(2007):大学生のデートDVの意識, 被害および加害経験の実態と学部間における違い, 日本看護研究学会雑誌, 30(3), 108.
- 6) 富安俊子, 鈴木江三子(2014):青年期男女に対するデートバイオレンス防止教育モデルの有用性, 母性衛生, 54(4), 479-485.
- 7) 藤田絵里子, 米澤好史(2009):デートDVに影響を及ぼす諸要因の分析とDV被害認識の明確化による支援の試み, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 19, 9-18.
- 8) 福島裕子, 植田朱美, 田端八重子, 他(2010):中学2学年のデートDVに関する意識調査〜ジェンダー意識や自尊心と暴力意識の関連性〜, 思春期学, 28(1), 80.
- 9) 藤生君江, 中野照代, 渥美陽子, 他(2016):医療系大学生の相互依存様式における意識-身近な人間関係との関連から, 岐阜県医療科学大学紀要, 10号, 83-96.
- 10) 畑田早苗, 馬場園陽一, 北野知地, 他(2007):医療系学生における職業的アイデンティティの達成状況とアイデンティティ・ステータスとの関係, 土佐リハビリテーションジャーナル, 6, 1-8.